

背景・目的

現職者と学生がひとつの課題を通して、共に学び、語り合う講座（学問知と臨床知の融合）を実施し、教育効果を検証することを目的として2010年度から行っている。2011年度において、実践者は専門家としての資質の向上を、学生は専門分野の学びを实践につなげることに認識を高めることをねらいとした。また、他学年の学生との交流も促し、学年を越えた学びをめざす。なお、この講座は管理栄養士および養護教諭の2つの職種について実施したので報告する。

実施内容

1. 管理栄養士のリエゾン講座

—実践者と学生のダイアログ—

昨今の食の重要性が見直され、管理栄養士の役割は健康や保健の分野でも益々大きくなっている。このためさらに管理栄養士の活動を広げるために、ダイアログ技法の一つである「ワールド・カフェ」を用いて管理栄養士について考えることとした。2回の実施を行い、①まず、ワールド・カフェを学ぶ講座とし、ダイアログの重要性とワールド・カフェの技法を学び、②2回目として、テーマを「管理栄養士を考える」として、ワールド・カフェを実施した。

参加者は①は27人（学生20人、実践者7人）、②39人（学生23人、実践者16人）であり、いずれも、学内や学外へのポスター、チラシにより参加者を募集した。学生は昨年の結果より、専門が理解できる3,4年生とした。なお、①の講師およびファシリテーターは、ダイナミック・オブ・ダイアログLLP 坂本敬行氏とした。②のファシリテーターは実践者である管理栄養士が行った。

結果及び考察

①1回目の講座では、ワールド・カフェの理解とワールド・カフェを体験した。ド・カフェでは、ファシリテーターとダイアログのための「問い」が重なる。ここでは「対話と会話はどのようか」についてダイアログを行った。参加者の多くが初めての体験であり、アンケート調査結果から96%の人が楽しい、やや楽しいと回答していた。また、自由記述による学びや気づきでは「自分自身の考えに気づいた」「考えがまとまった」など自分への発見、「すっきりした気持ち」「ストレス発散」など精神的な効果も見られた。また、「否定されないので気持ちが楽」「誰とでも対等に話せる」などといった話しやすい環境が示されていた。

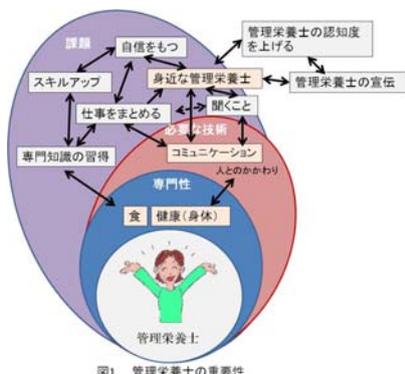


フェのワールの役割要となるように違



②2回目のワールド・カフェでは、1回目の参加者も含めて、管理栄養士について考えるワールド・カフェを行った。問いは「もし管理栄養士がいなかったら社会にどのような影響を与えるのか?」「社会に貢献できる管理栄養士とは?」の2つを用いた。ワールド・カフェ終了後のアンケート調査結果は、1回目と同様にほぼ全員が楽しさを感じ、新たな知識を得たが95%、管理栄養士の可能性が広がったが97%と有意なダイアログができていた。まとめとして、「もっとも重要だと思うこと」「明日から行動

したいこと」を参加者がカードに書きだした。得られたカードは管理栄養士4名でKJ法により整理を行った。その結果、図1に示すように管理栄養士の専門性では「食」「健康」、必要な技術としては「コミュニケーション」、今後の課題として「身近な管理栄養士」が抽出された。ワールド・カフェは一つの結論を導くものではなく、ダイアログ（対話）を通して個々の知識を集め、新たなアイデアを出す技法である。今回のリエゾン講座では実践者と学生と経験や知識量が異なる



実践者とワールド・カフェを用いることで、それぞれに新たな発見や管理栄養士について、より深く考えることができたと考えられた。今回、管理栄養士の課題も挙げられていることから、課題解決に向けて定期的にこのような機会をつくる必要があると考えられる。

2. 救護の理論と実践をつなぐリエゾン講座

—学校における特別活動時の救護の体験学習—

養護教諭を目指す学生の力量形成の一つとして、看護学、看護実習、救急看護法等の授業で学んだことを応用し、実践できる場（理論と実践のリエゾンの場）をつくりたいと考えていた。そこで、本年度は、養護教諭を目指す食品栄養学科学生・大学院生6名、教員（高瀬）、助手（遠藤、丑田）で救護班を組織し、「災害復興ボランティア」企画運営の「小学生のためのSummer College 2011」（2011年8月9～10日）に参加した。学校における特別活動時を想定し、救護計画の立案、物品の準備、企画実施中の救護の体験を通し、養護実践としての救護活動について考えることをねらいとした。

1) 救護計画の立案・救護物品の準備

①企画されたプログラムに全ての子どもたちが楽しく参加できるように援助する。②子どもたちの訴えをきちんと聴く。③医療処置が必要な怪我や疾病が疑われる児童ができた場合には、すみやかに応急処置をして医療機関につなぐ。以上3点を目標として掲げた。救護所はどの企画会場からも近い場所に設置した。大学保健センターと連携し、救護所では対応できない処置ができた場合の利用と医療機関への搬送について確認。校医以外に近隣の小児科の選定と事前連絡を依頼した。参加者にアレルギーの有無について事前調査を行った。遊歩道の散策が企画されているため、事前に遊歩道の危険箇所を確認した。熱中症、虫さされ、捻挫、切り傷、擦り傷への対応を中心に救護物品を準備した。



2) 当日の救護状況

1日目：参加者は小学生45名、保護者10名、学生ボランティア26名。対応した処置は、虫さされ3件、擦り傷1件、頭痛と腹痛を訴える児童への対応1件。

2日目：参加者は小学生40名、保護者8名、学生ボランティア26名。対応した処置はなかった。



結果及び考察

今回は、声かけ等の予防策が講じたのか、熱中症や捻挫、骨折等の医療行為が必要となる傷病は発生しなかった。実際に行った応急処置は「虫さされ、擦り傷」と軽傷なものであったが、実際に子どもたちの症状を聴き判断し処置を行った経験は、学生にとって貴重な体験であった。「頭痛・腹痛を訴える児童への対応」の事例では、児童の訴えを聴き、バイタルチェックと観察の基本的な対応を繰り返した結果、初めて出会う子どもたちとの行動に緊張と不安があるためと判断。本人の授業への継続参加の意思を尊重し、学生が側に寄り添い授業を継続。授業終了後、体調不良は訴えず迎えた来た保護者と帰宅。翌日は、不調を訴えることもなく過ごしていたことに安堵した。後日、本人と保護者から感想と感謝の手紙が寄せられた。その内容は、体調不良を訴えながら参加したにも関わらず、有田先生の授業のノートをしっかりとしており、保護者へ授業での発見と学びについて興奮気味に語って聞かせたこと等が書かれていた。

上記の事例に関わった救護班のメンバーと学生ボランティアとして参加した教員を目指す学生からは、子どもの学びの文脈に寄り添った体験ができ、大学の講義では体験できない大きな学びがあったとの感想が寄せられた。教育現場で求められる救急処置は、子どもたちの学びの文脈に寄り添った救護活動を行うことである。養護教諭だけでなく関わる教職員全員で、子どもたちの学習を保障する救護体制（予防も含め）をつくること、起きてしまった傷病に対しては情報を収集し判断し応急処置する能力が求められていることを学生だけでなく参加した教員も再確認した。大学の授業で行う、学生同士でのロールプレイでの学習には限界がある。学生にとって今回の体験は、学内の授業で学んだことを応用し実践する機会となった。特に、学校における教育カリキュラムと他の教職員との連携した傷病への対応をイメージし、症状を聴取するコミュニケーション能力、観察力、自身の応急処置のさらなる向上を目指すきっかけになったようである。参加した学生の90%が、またこのような企画があったら参加したいとの感想を寄せている。